心身障害学研究　Bull. Spec. Educ.
10(2)：47—57，1986

ドイツ児童研究の成立とHeipädagogikの学的体系化(1)
——イエナにおける児童研究活動を通して——

岡田英己子*　津曲　裕次

本稿では，従来のHeilpädagogik史で十分検討されていなかったJ.トリューパー（1855－1921）の治療教育施設（1890年設立）を，児童研究の成立，殊にイエナ大学・ライン教育学ゼミナールとの関連で分析することにより，当施設がHeilpädagogik史上いかなる意義と役割を有していたのかの解明を行なった。

以上の検討から，トリューパーの施設のHeilpädagogik史上の特質は，コッホの精神低格概念を核としたイエナ大学関係者のHeilpädagogikの学的体系化のための実験試行の場であったことが明らかにされた。また1890年代以降，民衆学校教員層に児童研究の成果が教育病理学・治療教育学的知識として普及し始めるが，トリューパーの施設はかかる国民学校における教育効率的要請を背景に，ライン教育学ゼミナールの教員養成のレベル・アップの一環として派生した局面をもっていた。従って当代のHeilpädagogikの一普及ルートとして，治療教育施設の専門的優位性を示す役割を担っていたといえよう。

キーワード：児童研究　治療教育学　治療教育施設　トリューパー　イエナ

Ⅰ.序

ドイツHeilpädagogik史については，優れた先行研究が重ねられている。が，大半が諸学説の検討という理論史・思想史的アプローチをとっている。それ故Heilpädagogikがいかなる契機によって「学」としての体系化を志向したのか，児童政策の諸段階に応じてどのような役割を果たしたのか，それに伴ってどのような概念の変容がみられたのか等については，それ程説得力のある見解が示されているわけではない。

本研究においては「Heilpädagogikの研究基盤の形成過程——Heilpädagogikの学的体系化」についての研究方法の枠組の精緻化を念頭におきつつ[1]，ドイツ児童研究がいかなる条件の下に成立し，それがHeilpädagogikの学的体系化にとって，どのような意味をもったのかを探ることを主要課題に設定した。具体的にはイエナにおけるトリューパー（Trüper, J. 1855－1921）の治療教育施設（1890年設立）を事例として提供しながら，上述の課題に即してドイツ児童研究の成立に対応するHeilpädagogikの学的体系化の模索過程を分析し，ドイツHeilpädagogikの諸特質の一つを提示することを意図している。

1890年代いわゆるHeilpädagogen（治療教育学者）によって創設された治療教育施設（トリューパーの施設や1895年設立されたヘラーの施設等）は，こうした考察課題を集約する有効な研究対象となりうる。なぜならば当代の児童を対象とする治療教育施設は，「特殊児童」「異常児童」に対する児童保護・教育政策等の成立期に運営されているため，それまでの障害児施設が学校教育に対して及ぼした影響力とは，制度上明確に峻別すべき歴史的性格を担っているからである。しかしこれまでの学説史中心のHeilpädagogik史研究では，トリューパーやヘラー（Heller, Th.）の業績については，著作分析の手法にのみ終始しており，その治療教育学研究・活動の拠点となっていた彼らの治療教育施設についての検討は欠如したままであった。

そこで本研究では，ドイツHeilpädagogik史研究[2]で十分論及されてこなかったトリューパーの治療教育施設の設立経緯を，当時のドイツ児童研

＊　心身障害学研究科

究の成立，殊にイエナ大学・ライン教育ゼミナールとの関連で分析することにより，トリューパーの治療教育学研究・活動が，ドイツHeilpädagogik史上いかなる役割を果たしていたのかを明らかにしていきたい。

手順として，まずIIで児童研究の成立をイエナでの児童研究活動の組織化をめぐる状況を中心に概観し，ドイツ児童研究の成立条件の独自性を抽出する。次にIIIで児童研究の専門分化との対応という視点から，Heilpädagogikの学的体系化の模索過程を分析する。具体的にはイエナ大学関係者との協力の下に運営されていたトリューパーの施設の設立経緯を通して，当施設の存在意義を明らかにする。さらにIVでは学校教育・児童保護事業へのHeilpädagogikの普及に際し，トリューパーの施設を媒介とする普及ルートが果たしていた役割と限界を考察する。そしてかかる検討をふまえて，ドイツHeilpädagogik史上における当施設の特質を明示することにしたい。

II. ドイツ児童研究の成立とイエナにおける児童研究活動

ドイツ児童研究の成立は，1880年代末から1900年代にかけてアメリカ児童研究運動のインパクトを受けて始まったとされている。ライプツィヒのヴント心理学の研究系譜をひくホール（Hall, S.）を介して，アメリカ児童研究の諸成果がドイツに逆輸入されたのである。しかしドイツ児童研究がアメリカの影響を受けて成立したとはいえ，1880年代〜1910年代はドイツ心理学の最盛期に当り，プレイヤー（Preyer, W.）以来の医学生理学的要素の強いドイツ児童研究の伝統的研究基盤は存続していた[3]。

このドイツ児童研究の研究系譜を整理してみると，大きくは次の三つに分けられる。即ち，①，アメリカ児童研究運動のインパクトによるウーファー（Ufer, C.），シュテルン（Stern, W.）らの児童心理学の系譜，②，ヴント（Wundt, W.M.）以来のドイツ実験心理学の流れを汲むライ（Lay, W.A.），モイマン（Meumann, E.）の実験教育学の系譜，③，ドイツ精神医学の知見に基づくコッホ(Koch, J.A.L.)，シュトリュンペル(Strümpell, L.）らの異常児研究の系譜である。

さて，ドイツ児童研究が組織的活動を開始する契機となったのは，何といっても1896年トリューパー，コッホ，ウーファー達による専門誌『児童欠陥——家庭・学校・社会生活上の教育病理学・治療教育雑誌（Die Kinderfehler, Zeitschrift für Pädagogische Pathologie und Therapie in Haus, Schule und sozialen Leben)』の発刊に拠る所が大きい。本誌は，1900年『児童欠陥——特に教育病理学を考慮した児童研究誌（Die Kinderfehler, Zeitschrift für Kinderforschung mit besonderer Berücksichtigung der pädagogischen Pathologie)』と名称を変更，1907年には，さらに『児童研究誌——特に教育病理学を考慮して（Zeitschrift für Kinderforschung mit besonderer Berücksichtigung der pädadogischen Pathologie)』と改称し，ドイツ児童研究の専門分化の推進に多大な功績を残した[4]。

こうした児童研究誌の刊行は，研究者レベルの読者層を想定していたのは当然だとしても，児童研究の普及という点では，より広範な読者層を考慮していたはずである。中でも当代において特筆すべきことは，民衆学校教員層による児童研究への取組みの動きである。1890年代から1900年代にかけて児童期を固有の対象とし，児童の個性・能力を科学的に把握していく必要性が，幅広い教員層や児童保護事業関係者に認識され始める[5]。既述のようにドイツ児童研究の成立は，アメリカのインパクトに拠る所が多いのであるが，国内のインパクトとしては，何よりもまずシュトリュンペルの『教育病理学（Die Pädagogische Pathologie oder Die Lehre von den Fehlern der Kinder.)』（1890年初版）の発刊が挙げられよう。本書は1910年までに4版を重ね，民衆学校教員や児童保護事業関係者に大きな感化を及ぼしたとされている。そしてこのシュトリュンペルの書に端を発して，1890年代以降教育界ではドイツ教員会議が中心となって，民衆学校教員層への教育病理学・治療教育学的知識の導入が始まる。例えば，1891年ライプツィヒ教育協会の要請に応えたケュツレー（Közle, G.）の懸賞論文「19世紀の教育学の中での教育病理学（Die pädagogische Pathologie in der Erziehungs kunde des 19. Jahrhunderts, 1893)」等は，その典型である[6]。

かかる教育界の1890年代の小さな動きは，90年代末ようやく組織的な児童研究活動へと繋がっていく。それはチューリンゲンのイエナで始まった。1899年トリューパーの呼びかけの下に，イエナ大

学夏期講座に集まった民衆学校・補助学校教員達の有志により，児童研究の会合がもたれた。席上，正常児と異常児の発達についての児童研究のための協会設立の決議がされ，毎年夏期講座を利用してイエナで集会をもつことを決定し，ここにドイツで最初の児童研究活動の組織化がなされたのである[7)8)]。そしてこの児童研究協会を足場に，トリューパーは1906年ベルリンで児童研究・児童保護会議を開催，700名もの参加者がここに結集した[9)]。

では，なぜイエナの地でこうした教員層の児童研究の必要性，殊に教育病理学・治療教育学的知識を求める声が汲みあげられ，児童研究活動の組織化の中枢を担うことができたのであろうか。イエナがドイツ児童研究の成立に重要な役割を果たしえた条件として，まず第一に着目すべきことは，当時イエナがドイツにおけるヘルバルト派教育学の牙城であった点である。いうまでもなくドイツ教員養成史上のヘルバルト派教育学の意義は高く，ライプツィヒのツィラー（Ziller, T.）の教育学ゼミナールと並んで，イエナ大学教育学ゼミナールは，19世紀後半から20世紀初頭にかけて，「技術学的」教育学の教授理論修得のためのメッカとなっていた。イエナ大学教育学ゼミナールは，ヘルバルト（Herbart, J.F.）のケーニヒスベルク大学教育学ゼミナールの教師であったブルツォスカ（Brzoska, H.G.）が，1831年イエナ大学に私講師として就任し，私的に教育学ゼミナールを始めたことに端を発する。1843年，同じくヘルバルト派の弟子であったシュトイ（Stoy, K.V.）がこれを引き継ぐ。傍らシュトイは同地に私立の少年教育施設を設立，シュトイの先駆的な教育実践の場とした[10)11)]。1886年，シュトイ亡き後ライン（Rein, W.）が着任，その際ザクセン＝ヴァイマール大公国政府との間でイエナ大学の附属学校として実習学校が正式に発足し，ここに大学での教員養成の制度的基盤が初めて成立することになる[12)]。

第二の条件としては，このイエナ大学の学風が，プロイセン邦の大学に比べて特色のある様相をみせていた点である。ビスマルク体制下のドイツの大学は，ベルリン大学の研究・教育施設の飛躍的な充実に代表されるように，経営面での政府の依存度が著しく強まる。が，非プロイセン邦に属するイエナ大学の場合，財政的に豊かでなかった四つの公国によって維持されていたため，世紀転換期以降，カール＝ツァイス商会を始めとした幾つかの財団の援助が大学運営に占める比重が高くなる。従ってイエナでは産業界の大学に対する教育要求をストレートに反映した施設整備が進み，学問研究の専門分化が確立していく[13)]。つまりプロイセン邦の大学に比べて，実学的・専門学校的要素が比較的早く波及していたのである。さらにまたイエナ大学は，イギリスやアメリカの大学拡張運動のドイツでの窓口となっており[14)]，若干の大学当局の圧力はあったとしても，学問の大衆化・通俗化のための試みを成し遂げ易い条件をもっていたという点も銘記しておく必要があろう。こうしたイエナ大学の学問的雰囲気が，ライン教育学ゼミナールの下に集まった教員達を児童研究活動の組織化へといざなう基盤を醸成したのである。

具体的な児童研究活動の組織化は，前述したようにラインが民衆学校教員層を主たる対象として，1889年以来毎年開講していた夏期講座に研修に来る教員達によって始められた[15)]。ライン教育ゼミナールの方針は，大学レベルの民衆学校教員養成が認められていなかった帝政下ドイツにあっては，格別深い意義をもっていた。イエナに集まった民衆学校教員達はそれだけに鮮明な問題意識をもっており，新しい児童心理学や教育病理学・治療教育学的知識の吸収は旺盛であったものと思われる。そしてこうした教員達によって始められた児童研究活動こそが，当代のドイツ教員組合等の意向とも相まって，児童研究の通俗化を推し進める力となっていくのである[16)]。

それは，帝国主義的リベラリズムともいえる大学研究体制の確立期に許容された教育自治体的な場の中で開花したヴァイマール期教員養成制度の方向の先取りであった[17)]。教授理論のような「技術学的」教育学は教員養成所のレベルで行なうべきだとしていた伝統的アカデミズムの支配するプロイセン邦の大学に対して，ライン教育学ゼミナールでは，新しいイデオロギー関係を担いうる人間を育成するための教育学の役割を明確化することによって，教員養成を主軸とした大学における教育学研究システムの制度化を意図していたのである[18)]。後述するトリューパーの治療教育施設とイエナ大学関係者との協力体制や，ライン教育学ゼミナールでのHeilpädagogikの講義[19)]にみられるような極めて早期の大学研究機関でのHeilpädagogikの学的体系化志向の動きも，かか

る脈絡において把握する必要があろう[20]。

むろんライン教育学の核心は児童研究の分野ではなかった。だがトリューパーは，イエナでの児童研究誌の刊行や児童研究活動の組織化に際して，「他ならぬラインの刺激なしには，そしてラインが1886年新たに設立し直した教育実験施設たる実習学校をもつ教育学ゼミナール[21]なくしては，そうした活動を始めることはおそらくなかったであろう。」[22]と後日述懐している。即ちライン教育学ゼミナールにおける「技術学的」教育学の学問的自立と教育学研究システムの制度化の意図こそが，大学拡張運動に示されているようなイエナ大学の学問の大衆化の学風と相まって，イエナをドイツ児童研究活動の発祥地とするに至らしめたのである。そしてかかる「技術学的」教育学を希求する姿勢は，トリューパーの施設に協力したイエナ大学関係者達に共通してみられる傾向であった。

以上ドイツ児童研究の成立をイエナにおける児童研究活動の組織化を中心に検討しつつ，児童研究の専門分化とライン教育学ゼミナールでの「技術学的」教育学に対応するイエナでのHeilpädagogikの学的体系化の模索過程の背景を分析した。次のIIIでは，こうしたイエナ大学・ライン教育学ゼミナールの企図の様相との関連で，トリューパーの施設の設立経緯をめぐる動きを捉え，イエナでのHeilpädagogikの学的体系化志向の特質と，当施設の存在意義を明らかにしていきたい。

III. イエナでのHeilpädagogikの学的体系化とトリューパーの治療教育施設

1. J.トリューパーのHeilpädagogik研究・活動——治療教育施設の設立経緯を中心として[23]——

ここでは，まずトリューパーの研究と活動を，彼の治療教育施設の設立経緯を通して概観する。

トリューパーは，1855年ドイツのブレーメン近郊に生まれた。15歳で村落学校の補助教員となり，17歳から20歳まで教員養成所で教育を受けた。1875年から12年間，小・中学校の教員を勤め，ブレーメンの若手教員のリーダーとして活躍した。当時のトリューパーはペスタロッチ教育を理想としていたが，1880年ヘルバルト派の教育学者デルプフェルト(Dörpfelt, F.W.)との出会いが，以後の彼の教育実践に大きな影響を与えた。

勉学への意欲と生来の体質の虚弱さから，トリューパーはブレーメンの学校当局に休暇を申し入れ，1887年からイエナ大学で，オイケン(Eucken, R.)，ヘッケル(Haeckel, E.)，ビンスワンガー(Binswanger, O.)，ラインらの講義をとる。その傍らイエナ大学付属実習学校で教員として勤務しながら生計費を得ることになったトリューパーにとっては，とりわけラインの影響力は強く，彼を通じてトリューパーはヘルバルト派教育学を体得するのである。さらにイエナ大学教授であり，かつツァイス財団の長として大学運営に力を占めていたアッベ(Abbe, E.)との親交を深め，トリューパーは6ゼメスター目から本格的に社会教育学の学位修得を決意する。

が，1890年春イエナ大学附属精神病院の長ビンスワンガーを介して，9歳の少年の観察を依頼されたことで，その進路を変えることになる。ブレーメンの教員時代から青少年の病的徴候に関心をもっていたトリューパーは，承諾の返事をした。以後Heilpädagogik研究に力を注ぎ，同年発達障害児のための治療教育施設を開設する。前述のライン，ビンスワンガーの他に，イエナ大学医学部医長であった精神医学者・心理学者のツィーエン(Ziehen, Th.)，神経学・精神医学者のストローマイヤー(Strohmayer, W.)らイエナ大学関係者の協力の下に運営されていた。トリューパーは，また『精神病的低格(Psychopathische Minderwertigkeiten)』(1891－1893)の著書により，ドイツ及び日本の治療教育の対象規定に多大な感化を及ぼしたコッホとの親交も厚かった。即ち1890年代以降トリューパーの施設を軸にイエナで展開された研究活動は，ドイツHeilpädagogikの学的体系化の典型的な系譜を示していたといえよう。

トリューパー自身の活動もHeilpädagogikの学的体系化に寄与している。1893年，トリューパーは『児童期の精神病的低格(Psychopathische Minderwertigkeiten im Kindesalter)』を著わす。本書は直ちにプロイセン文部省で教員の必読書に指定される。これは当時の教育界に，教育病理学・治療教育学的知識の必要性が高まってきていたことを如実に示している。

設立後数カ年をへ，イエナ近郊にあるその施設は，「トリューパーの教育施設」の名称で名声を博するに至り，各国から多数の見学者が訪れている。

我国でも富士川游・下田次郎・三田谷啓・林蘇東らが見学・実習を行なっており，三田谷と林は後年トリューパーの施設をモデルに，三田谷治療教育院並びにカルナ学園を設立することになる[24)25)]。

1921年，トリューパーの死後もイエナ大学関係者との繋がりは密接であった。心理学検査ではペータース（Peters, W.），教育面ではイエナ・プランを附属実習学校で実施していたペーターゼン（Petersen, P.）の協力を得ていた。さらにイエナにある治療教育関係機関との連携にも積極的であった。障害幼児のためのモンテッソーリ教具の採用，イエナ・モンテッソーリ幼児の家との交流，イエナ社会事業学校の実習生の受け入れ，教育相談機関の設置，児童の措置決定・施設送致に際しての児童局との提揭等，種々の先駆的な児童保護活動を試行した。

なおトリューパーの施設は，1955年ドイツ民主共和国の国立施設に移管され，翌56年それまでの施設の指導者達は，ここでの治療教育の遂行を断念することになる。すでに1950年，ラインの後任ペーターゼンが指導していたイエナ大学附属実習学校もまた，資本主義教育学の理論的拠点，ブルジョア教育学校として閉鎖を命じられ，輝やかしい教育実践の歴史的使命を終えるに至っていた。

2．トリューパーの治療教育施設の存在意義

以上の概観から明らかなように，イエナ大学との密接な連携の下に，トリューパーは施設運営を行なっていた。では，こうしたイエナ大学関係者の Heilpädagogik の学的体系化志向に対して，新設のトリューパーの施設はいかなる存在意義をもっていたのであろうか。

トリューパーに施設設立をさせしめた直接的契機は，1890年春ビンスワンガーを介して，大学附属病院から精神的欠陥を有するが知的にはさほど遅れていない少年の観察を，相次いで二名委託されたことに拠る。ここで留意しておきたい点は，当時イエナ大学附属精神病院の長であったビンスワンガーは，すでにこの時点でコッホの精神低格概念を熟知していたであろうということである。ちなみにシュトリュンペルは，『教育病理学』を著わした翌1891年コッホの『精神病的低格』の新著に出会い，二版以降大幅にその概念を採り入れている[26)]。これに対し，ビンスワンガーはその立場上最新の医学的知見の掌握はしていたはずであり，上述のコッホの書に先だって，ほぼ同じ内容を記したコッホの『精神医学入門概要（Kurzgefasster Leitfaden der Psychiatrie）』（1888）を読んでいたものと思われる。

1880年代から90年代にかけてドイツ精神医学は飛躍的な発展を成し遂げ，大学研究機関の整備も着々と進みつつあった。こうした精神医学の研究動向により，「特殊児童」「異常児童」の対象規定にも一定の学的進展がみられた。中でもコッホの精神低格の概念はその最大のインパクトとなり，1890年代から1930年代にかけてドイツ Heilpädagogik の学的体系化の理論的支柱の一つとなっていたといっても過言ではない[27)]。即ち児童研究の専門分化の進行から，Heilpädagogik という新しい「学」の体系化の必要性をアプリオリに感知していたイエナ大学関係者の企図が，トリューパーの施設創設の背景にあったからこそ，医学・心理学・教育面での全面的な研究協力体制をとることができたものと考えられるのである。ドイツでは，1910年代以降になると医学・心理学等の大学研究機関と教育現場との協力は各地に波及する。が，1890年の時点でそれが可能であったのは，何といってもシュトイ以来の実験学校・施設への許容度が，イエナでは極めて高かったことに拠る所が多い。

既述のように，1890年代教育界では民衆学校教員層を対象として教育病理学・治療教育学的知識の導入が開始されるのであるが，こうした民衆学校教育における児童研究の必要性の認識が，学齢児童，生徒の細分類，即ち「特殊児童」「異常児童」の明確な対象規定を促す動因となっていたのである。トリューパーの施設は，かかる児童の個性・能力の把握を教育効率上必要とした当代の民衆学校の教育的要請を背景に，ライン教育学ゼミナール・附属実習学校の主眼点であった民衆学校教員養成のレベル・アップの一環として派生してきていた局面をもっていたと位置づけられるのである。

以上，イエナ大学の医学・心理学・教育学関係の研究者達による Heilpädagogik の実験試行の場としてのトリューパーの施設の存在意義を明らかにしてきた。Ⅳでは，トリューパーの施設の主要な問題状況を，Heilpädagogik の普及ルートとしての役割に限定して指摘してみよう。

IV. Heilpädagogik の普及ルートとしてのトリューパーの治療教育施設の役割と限界

さて，筆者はすでに Heilpädagogik の学的体系化を可能ならしめる研究基盤の形成条件として，大学研究機関による研究の系譜，研究活動の組織化，専門誌の発刊，等を提示している[28]。これに基づき Heilpädagogik の実践現場への普及ルートを類型化してみると，① Heilpädagogik 研究者達による実験試行の場としての治療教育施設を媒介とする普及ルート，② Heilpädagogik 関係の専門誌の発刊，即ち教育ジャーナリズムによる普及ルート，③ Heilpädagogik 講習会や講演，大学及び教員・保母養成所等での講義による普及ルート，の三つにまとめられよう。

Heilpädagogik の普及ルートとしてのトリューパーの施設の主要な役割は，前述したように①にあると規定できる。が，施設設立者トリューパー自身が1896年以来児童研究誌の主幹であったこと，ヘルバルト派教育学のメッカであったライン教育学ゼミナール・附属実習学校には，世界各国から多数の教育関係者が研修に来ており，こうした人々の中で，「特殊児童」「異常児童」に関心をもっていた者は，同地のトリューパーの施設を見学・実習するのがほぼ通例となっていたこと等から，②，③の普及ルートとしても，かなりの力量を有していたものと判断できる。

即ち実験試行の場としての存在意義の他に，イエナ大学・ライン教育学ゼミナールの協力を受けていたトリューパーの施設では，設立当初からイエナ大学附属実習学校と類似の位置にあり，教育実習校的性格を期待されていたと捉えられる。多数の民衆学校・補助学校教員や新教育運動の担い手達が，トリューパーの施設で Heilpädagogik の理論と方法で学び，内外にそれを普及させる提唱者となっていったのである。

例えば田園教育舎系新教育運動の指導者リーツ（Lietz, H.）は，学校設立（1897年）に先んじて，ラインの推薦で，まず附属実習学校とトリューパーの施設に勤務，次いで1896年からイギリスのレディ（Raddie, C.）のアボッツホルム校の教師として，計画的・意図的な教育実践を積み重ねている[29]。同じくゲヘープ（Geheeb, P.）も，1893年から94年にかけてトリューパーの施設で働いている[30]。また1898年から1934年にかけてベルリン特殊教育の組織拡充とその教員養成に尽力したフックス（Fuchs, A.）も，ベルリンでの教育実践に先立ち，トリューパーの下で実習を行なっている[31]。

ところで Heilpädagogik 概念の多義性の発生径路の解明を，その普及ルートを検証するという視点にたって該期の Heilpädagogik 研究の概念規定を整理してみると，大きくは広義化と狭義化の二極化傾向かに分けられる。つまり①．児童保護事業の成立に伴う児童施設・児童保護諸機関の整備・拡充により，教護教育を中心に児童保護の専門的機能として Heilpädagogik が導入されていく，いわゆる広義化，と②．補助学校を中心とした学校教育の場への普及，いわゆる狭義化，とにまとめられうる。Heilpädagogik の学的体系化のための実験施設としての位置にあったトリューパーの施設では，こうした Heilpädagogik の二極化傾向の動向を反映して，精神低格と教育可能な精神薄弱に限定していた当初の施設入所児の対象規定が変化していくという様相を呈する。即ち世紀転換期からの Heilpädagogik の狭義化現象の普及とは対照的に，トリューパーの施設では，当初の Heilpädagogik 概念が漸次広義化され，既存の学校教育に不適応症状を呈する年長児の受け入れを進めていくという途を辿るのである[32]。田園教育舎系新教育運動の指導者リーツやゲヘープらが，田園教育舎設立に先立ってトリューパーの下で働いていたという点，さらにドイツ新教育運動の早期の主眼点が，中等学校段階の教育改革に置かれていたということからも，1890年ドイツ学校会議でのギムナジウム改革路線に対峙する新学校設置運動の一起点としての役割を，トリューパーの治療教育施設は果たしていたといえよう。

1920年代，ドイツ Heilpädagogik はいわゆる最盛期といわれる活況を呈するに至る。今日の西ドイツの Heilpädagogik 史研究においても，ヴァイマール期の Heilpädagogik の普及を皮相的に受けとめ，Heilpädagogik の名を冠する施設・機関の増設をもって最盛期であったと評しているものが多い。確かに1920年代ドイツでは，障害児教育・児童保護事業分野への Heilpädagogik の普及が定着化する。都市部を中心に治療教育施設・機関が増え，Heilpädagogik の理論・方法は多様な展開を示すようになる。が，ここで問題として注目すべきことは，Heilpädagogik の学的体系化を志向し推進した人々が標榜した「学」の水準とその

内容についてである。結論を先どりしていうならば，Heilpädagogik 史研究において筆者が対象とする時期，1890年代～1930年代の Heilpädagogik の学的体系化は，失敗に帰したといえよう。当代においては，Heilpädagogik の研究基盤の不備や，Heilpädagogik の普及のための運動主体の組織的弱点，大学研究機関での Heilpädagogik の理論・方法と現場での実践内容の懸隔，等が自覚され，顕在化するが，その一方では無定見な Heilpädagogik 概念が，「特殊児童」「異常児童」を対象とする学校教育・児童保護事業の諸分野に定着していくというパラドキシカルな発展過程がみられるのである。即ち世紀転換期以降の Heilpädagogik の普及は，単に理念的な Heilpädagogik の普及化現象にすぎない面をもっていたのであり，学校教育及び児童保護事業の制度的受容基盤を視野に含めた実質的な Heilpädagogik の理論・方法が，実践現場に定着していたということではなかったのである。

こうした Heilpädagogik の学的体系化志向と実践現場でのパラドキシカルな発展過程の中に，トリューパーの治療教育施設を位置づけて考察してみるならば，その専門的なモデル施設としての孤立的位置が鮮明なものとなろう。イエナ大学・ライン教育学ゼミナールをバックにして，Heilpädagogik の普及ルートとしての力量を有していたトリューパーの施設での治療教育施設の専門的優位性の主張も，実践現場への定着という点では，制度的受容基盤の欠如により多分に理論的な普及でしかなく，かかる点において，トリューパーの施設を媒介とする Heilpädagogik の普及化は，限界を有していたといえよう。

1920年代から30年代にかけての Heilpädagogik 理論の社会ダーウィニズムへの傾倒，人種理論・優生学的知見の積極的導入も[33]，こうした Heilpädagogik の学的体系化の研究基盤と実践基盤との懸隔の上に形成されえたのである。要するに当代の Heilpädagogik の学的体系化志向は，「学」としての自立の模索過程であった反面，成立期の障害児教育・児童保護事業の制度的整備・拡充のための一種のイデオロギー的役割を背負わされていたものと位置づけられるのである[34]。

V. 結　語

以上，1890年代以降のドイツ児童研究の専門分化との対応という視点から，トリューパーの施設を軸としたイエナでの Heilpädagogik の学的体系化志向をめぐる諸問題を検討してきた。以下，序に示した研究課題との関連で，これまでの検討作業から導かれる主要な論点を整理し，結びとしたい。

1890年に設立されたトリューパーの治療教育施設のドイツ Heilpädagogik 史上の特質としては，① 精神低格を中心とした Heilpädagogik の学的体系化の実験試行の場であったこと，② Heilpädagogik の普及ルートとしてかなりの力量を有していたこと，の二点が指摘されえよう。

まず①の実験試行の場という点についてであるが，既述の如くトリューパーやヘラーといういわゆる Heilpädagogen によって，1890年代に創設された治療教育施設の存在意義を支えた学的背景には，コッホの精神低格概念を重視する研究の系譜が濃厚であった。以来トリューパーやヘラーが，自らの施設での実験試行に基づき学的体系化を目ざしたその理論と方法は，彼らが共に社会政策的見地からの児童保護事業の組織化・専門化，殊に教護教育の専門的機能の向上を重視していたことと相まって[35]，治療教育施設の専門的優位性を，より広義な対象に拡大化していく役割を担うことになるのである[36]。

次に②の普及ルートとしての力量という点についてであるが，Heilpädagogik 研究以前に社会教育学を学んでいたトリューパーは，学校機能の社会的拡大を通して，家族の教育的機能を代替する方向を目ざしていた。それ故 Heilpädagogik の専門性を発揮する場として，学校型の治療教育機関ではなく，児童の全生活を把握する通園型ないしは居住型施設が効果的であると考えていた。補助学校を治療教育施設とする1920年代補助学校連盟による専門化並びに専門職化志向の動きは[37]，イデオロギーとしての Heilpädagogik の役割を考察する際のキー概念となりうるが，トリューパーの施設でのかかる治療教育施設の専門的優位性の主張は，実習生を介して，漸次学校教育の場に普及していく一つのルートを形成していたのである[38]。こうしたトリューパーの施設の普及ルートの特質は，ラインと彼の門下生による国民学校教育改革構想の脈絡の中に位置づけた場合，いっそう明瞭となる。ライン教育学ゼミナールでは新たなイデオロギー関係を担いうる人物育成を企図し

て，国民学校教員養成のレベル・アップを目ざしていたのであり，トリューパーの施設もまたその企図の一環として位置づけられたからこそ，イエナ大学関係者との協力体制の下に運営が進められたものと考えられるのである。

従って世紀転換期以降，殊にヴァイマール期のHeilpädagogikの普及化現象に対して，治療教育施設の専門的優位性を主張するトリューパーの施設での理論と方法が，具体的にどのような形で継承され展開していくのかの問題，なかんずく補助学校教育学と同一視されたHeilpädagogik概念の狭義化との対比において，イエナ大学・トリューパー治療教育施設でのHeilpädagogikの学的体系化を比較検討することは，今後の主要な研究課題となるであろう。

注

1）筆者のドイツHeilpädagogik史研究の課題・方法については，拙稿（1985）：ドイツHeilpädagogik史研究の方法——児童保護事業期におけるHeilpädagogikの位置づけについて，日本特殊教育学会第32回大会発表論文集，706－707頁を参照されたい。

2）本稿では，Heilpädagogikの学的体系化の成立期を主たる研究対象としている。従って，スイスHeilpädagogik史との識別上，かかる表現を用いた。

3）Schmidt, R.（1977）：Intelligenz-und Leistungsmessung. Geschichte und Funktion psychologischer Tests. Frankfurt, S．64—65, S. 73.

4）保守的中産階層の母親達によって推進されたアメリカの児童研究運動とは対照的に，ドイツの場合児童研究を通俗化のレベルで普及させた主な担い手は，ヘルバルト派教育学の系譜に属する教育学者や教員達であった。そして当代のヘルバルト派教育学の特質は，コッホの精神低格概念を重視するシュトリュンペルの教育病理学的知見の摂取に力を入れていた点が指摘されえよう。従って，ヘルバルティアーナにより編纂されていた児童研究誌の名称の変遷に典型的に示されているように，ドイツ児童研究の専門分化の進行に伴う諸学の自立過程，即ち児童心理学・児童精神医学と，Heilpädagogikという特異な二分化も，こうしたドイツ児童研究活動の運動主体の性格に起因していたものと考えられる。

ヘルバルト派教育学とHeilpädagogikの学的体系化については，Buss, A.（1962）：Herbarts Beitrag zur Entwicklung der Heilpädagogik. Weinheim／Bergstr.が詳しい。

5）Ellger-Rüttgardt, S.（1980）：Der Hilfsschullehrer. Sozialgeschichtliche einer Lehrergruppe. Weinheim／Basel. S. 55, S. 450.

6）Strümpell, L.（1890, [4] 1910）：Die pädagogische Pathologie oder der Lehre von der Fehlern der Kinder. Leipzig. S. 806—808.

7）第1回児童研究協会については，次の文献を参照，Seyfert, R.（1899）：Eine Vereinigung zur Erforschung der Eigenart im Seelenleben der Kinder. In：Die Kinderfehler. 4Jg., S．165—170，S．195—197.

8）ちなみにイエナの児童研究協会の委員会メンバーは，イエナ大学関係者が占めている。ビンスワンガー（精神医学教授），ゲルトナー（Gärtner，衛生学教授），ライン（教育学教授），ツィーエン（神経学・精神医学教授），レーメンジィーク（Lehmensieck，教育学ゼミナール教師）およびトリューパーである。Ein Verein für Kinderforschung (1900) In：Die Kinderfehler. Z.f. Kinderforschung mit besonderer Berücksichtigung der pädagogischen Pathologie. 5 Jg., S．9.

9）Kongress für Kinderforschung und Jugendfürsorge, vom 1. bis 4. Oktober 1906 zu Berlin. (1906) In：Z.f. Kinderforschung. 11Jg., S．113.

10）Geschichte der Universität Jena, 1548／58—1958. Bd. 1, (1958), Jena. S. 421—422.

11）1898年～1900年イエナ留学中に何回かトリューパーを訪問していた富士川游は，こうしたシュトイの施設運営の先例が，トリューパーの治療教育施設の創設を容易ならしめたと述べている。富士川游(1909)：トリューペル氏教育院，児童研究，13巻1号，20頁

12）Geschichte der Universität Jena…a.a. O., S. 475.

13）Ebd., S．328—332, S．498—504.

14）大学の学問の大衆化を目ざした大学拡張運動の思想は，イエナに導入され，以後瞬く間に全ドイツに拡がっていった。Ebd., S．475.

15）Ebd., S．475—476.

16）Neufeld-Chortitza, A.（1900）：Zweite Vesammlung des allgemeinen deutschen

Verein für Kinderforschung. In : Die Kinderfehler. Z.f. Kinderforschung mit besonderer Berücksichtigung der pädagogischer Pathologie. 5 Jg., S . 214.

17) 通常新教育運動の興隆とヘルバルト主義教育の凋落とは，対立的図式で捉えられるが，ヘルバルト派教育学の牙城イエナ大学教育学ゼミナールの中で，しかもラインの教授理論の最も華やかな時期といえる1890年前後に，田園教育舎系の改革教育学の理論に直結する萌芽が育っていたことに留意しておく必要があろう。例えばLietz, H. (1917) : Was bedenten Pädagogisches Universitäts-Seminar und Übungschule zu Jena für die Dentschen Land-Erziehungsheime ? In: Hofmann, B. (1917): Das Lebenswerk Prof. Dr. Wilhelm Reins. Langensalza. S . 120—126.等

18) 山内芳文 (1970) : イエナ大学における教育学研究システムの確立について，日本の教育史学，第13集，130—133頁.

19) ちなみに乙竹岩造は，1904 (明治37) 年イエナの夏期講座に参加,『欧米教育視察報告十二集』(1908)で第二部教育科の講義内容を紹介している。トリューパーも，ここで「児童及び少年の性癖」を講義している。

20) 体系的なHeilpädagogikの養成過程は，1913年エッセンの治療教育学ゼミナールに始まる。また統一学校運動の気運の高まる中で，補助学校連盟が大学での治療教育学講座の設置を要求したのは，1920年のことであった。かかる点からみても，ライン教育学ゼミナールとトリューパーの施設を核としたイエナでのHeilpädagogikの学的体系化志向の先駆性が明らかであろう。Geiger, G (1977) : Schwachsinnigenfürsorge. Eine Analyse der "Zeitschrift für das Idiotenwesen." Freiburg i. B. S 174—176.

21) イエナ大学附属実習学校は，1886年10月，3クラス，25名の生徒で国民学校として発足，1888年にその内の1クラスがギナジウム・クラスに変更されている。トリューパーが在籍していた1890年までは，教育学ゼミナールの学生は平均20名前後であった。学生達はラインの指導の下，附属実習学校で教育実習を行なっていたが，その際特に児童の心理観察と，新しい教材・教具の試行に重点が置かれていた。Reich, E. (1888): Bericht über die Thätigkeit des Seminars. In: Rein, W. (Hrsg.): Aus dem Pädagogischen Universitäts-Seminar zu Jena. 1. Heft. S . 10. 及びRein, W. (1890) : Vorwort. In: Ebd. 2. Heft. S . X—XII.

22) Trüper, J. (1917) : Wilhelm Rein zum 70 Geburtstage. In: Z.f. Kinderforschung. 22 Jg., S . 338.

23) トリューパー及びトリューパーの治療教育施設については，次の文献を参照した。①. Hasse, O./Eyferth, H. (Hrsg.) (1927): Blätter der Heilerziehung. Halbsjahrschrift der Sophienhöhe zu Jena. (Trüpers Erziehungsheime). 4. Heft, Halle a.S. ②. Stukenberg, W. (1923): Johannes Trüper. Ein Nachruf von Kreisschulrat W. Stukenberg. In: Z.f. Kinderforschung. 27 Jg., S. I—VIII. ③. Trüper, H. / Trüper, I. (Hrsg.)(1978): Ursprünge der Heilpädagogik in Deutschland. Johannes Trüper—Leben und Werk. Stuttgart. ④. Trüper, J. (1910): Das Erziehungsheim und Jugendsanatorium auf der Sophienhöhe bei Jena. Langensalza.以下トリューパーの活動に関する注は，原則として省略する。

24) 我国におけるドイツHeilpädagogik研究の系譜については，拙稿 (1985) : ドイツHeilpädagogik研究の我国への導入過程について，心身障害学研究，第9巻第1号，を参照されたい。

25) トリューパー側の資料でも，トリューパーの治療教育施設をモデルとした日本の施設についての報告がなされている。Trüper, H. / Trüper, I., a.a.O., S. 168.

26) Strümpell, L. , a.a.O., S. VIII.

27) 例えば，Heller, Th. (1923) : Die Heilpädagogik in Gegenwart und Zukunft. In: Bericht über den ersten Kongress für Heilpädagogik in München. Berlin, S. 66—73.等に如実に示されている。

28) 拙稿 (注24)，31頁

29) 従来のHeilpädagogik史の通説では，Heilpädagogikの理論形成への改革教育学の影響はかなり遅い時期，即ち1920年代以降とされてきている。例えば，Beschel, E. (1960): Der Eigenchrakter der Hilfsschule. Weinheim /Bergstr. S. 110やHeese, G. / Wegener, H. (Hrsg.)(1969): Enzyklopädisches Hundbuch der Sonderpädagogik und ihrer Grenzgebiete. Berlin, S. 1267,等。しかし，トリューパーの施設がドイツ新教育運動の牽引力となった田

園教育舎系の新学校設立の一起点であったという事実を通して，通説とは異なり，新教育運動の早期に治療教育施設が果たしたパイオニア的役割が明らかになったものと思われる。

30) ゲヘープは，その後アルコール中毒患者の世話やベルリンの労働者居住地区の託児所等で社会事業活動に従事，1902年リーツに呼ばれ，以来田園教育舎の発展に尽力する。天野正治編（1982）：現代に生きる教育思想，第5巻，ぎょうせい，101頁

31) Fuchs, A.／Beschel, E. (Hrsg.)(1967): Versuch einer Hilfsschulpädagogik. Berlin, S. 105.

32) Trüper, H. / Trüper, I., a.a.O., S. 51—53.

33) ヴァイマール期の Heilpädagogik の著作は，全般的に社会ダーウィニズムの影響がみられる。それは1910年代に始まる優生思想の人種政策への適用というドイツ社会ダーウィニズムの変容過程を示す一指標である。その概要については，Höck, R. (1979)：Die Hilfsschule im Dritten Reich. Berlin, の第2章 "Der Einfluß des Sozialdarwinismus auf das Aufgabenverständnis der Heilpädagogik in der Weimarer Zeit." S. 20—44. を参照されたい。

34) こうした Heilpädagogik のイデオロギー的役割は，Heilpädagogik の専門的機能を積極的に摂取せんとしていた補助学校連盟の運動に如実に示されている。補助学校は，ヴァイマール期においても学校組織上は国民学校とみなされており，それだけに1898年結成された補助学校連盟は，他の特殊教育教員層以上に，個別障害学（補助学校教育学）の確立と専門職化志向が強かったといえよう。その経緯については，Ellger-Rüttgardt, S., a.a.O., S. 54—71. S. 250—257. が詳しい。

35) 例えばトリューパーは，1908年ドイツ最初の少年裁判所設立に尽力している。

36) 1912年第14回ドイツ精神薄弱教育・保護協会の会議でのヘラーの講演 "Die erziehlichen Aufgaben des Heilpädagogen" 等。

37) 当代の補助学校を専門的な治療教育施設に変更せんとする典型的な主張は，ライプツィヒの補助学校連盟の指導者バァルチ等にみられる。Bartsch, K. (1924): Die Hilfsschule, eine heilpädagogische Anstalt. In: Z.f. Kinderforschung. 28 Jg., S. 183—196. 及び Ders. (1924): Von der Hilfsschule zur heilpädagogischen Anstalt. In: Die Hilfsschule. Heft 11. S. 172—185., Heft 12. S. 194—210.

38) トリューパーの施設年報に拠ると，補助学校を精神薄弱児学校から治療教育施設へと転換させる役割を，トリューパーの治療教育施設が果たしたと記載されている。Stukenberg, O. (1927): Über Johannes Trüpers Bedeutung für die Heilpädagogik. In: Hasse, O. / Eyferth, H. a.a.O., S. 10.

「ドイツ児童研究の成立と Heilpädagogik の学的体系化(1)——イエナにおける児童研究活動を通して」

本研究では，従来の Heilpädagogik 史で十分検討されていなかった J.トリューパー（1855—1921）の Heilpädagogik を，児童研究の成立，殊にイエナ大学教育学ゼミナール・附属実習学校との関連で分析することにより，トリューパーの治療教育施設（1890年設立）が，Heilpädagogik 史上いかなる役割を果たしていたのかの解明を意図している。

まず児童研究の成立を，イエナにおける児童研究活動の組織化を通して明らかにし，次いで児童研究の専門分化に対応する Heilpädagogik の学的体系化の過程を分析した。具体的には，イエナ大学関係者の協力の下に運営されていたトリューパーの治療教育施設を事例として，そこでの Heilpädagogik の特質を示し，学校教育・児童保護事業への Heilpädagogik の普及ルートとしての当施設の役割と限界を考察した。

以上の検討から導き出された論点を整理してみると，① トリューパーの治療教育施設設立に関与したイエナ大学関係者達は，「技術学的」教育学の学問的自立の必要性を認識していたこと，② 1890年代以降，民衆学校教育に児童研究の成果が治療教育学的知識として定着し始めるが，トリューパーの治療教育施設は，こうした当代の民衆学校教員層の教育的要請を背景に，教育学ゼミナール・附属実習学校の教員養成のレベル・アップの一環として派生した局面をもつこと，③ トリューパーの治療教育施設は，田園教育舎系新教育運動の一起点であったこと，また W. ラインの影響から発足時より教育実習校的役割を有しており，多数の民衆学校・補助学校教員が，ここで Heilpädagogik を学び，内外に普及させる担い手となったこと，にまとめられよう。

Summary

"Entstehung der Kinderforschung und wissenschaftliche Systematisierung der Heilpädagogik (1)——Durch die Betrachtung der Kinderforschung in Jena"

Emiko Okada　　Yuji Tsumagari

Diese Abhandlung analysiert die bisher nicht untersuchte Heilpädagogik von Johannes Trüper (1855—1921) im Zusammenhang mit der Entstehung der Kinderforschung, insbesondere im Zusammenhang mit dem Pädagogischen Universitäts-Seminar und der Übungsschule in Jena. Es wird Klarheit darüber geschaffen, welche Rolle die von Trüper im Jahre 1890 gegründete Heilpädagogische Anstalt in der Geschichte dre Heilpädagogik spielt.

Zunächst wird die Entstehung der Kinderforschung durch die Organisierung der verschiedenen Bewegungen der Kinderforschung geklärt, und dann der der Spezialisierung der Kinderforschung entsprechende wissenschaftliche Systematisierungsprozeß der Heilpädagogik analysiert. Konkret gesagt, wird der Charakter der Heilpädagogik in der von Trüper gegründeten Heilpädagogischen Anstalt gezeigt, die in Zusammenarbeit mit der Universität Jena geleitet wurde. Weiterhin werden die Rolle und die Grenzen der Anstalt aufgezeigt, die in der Schulpädagogik und Jugendfürsorge für die Verbreitung der Heilpädagogik verantwortlich war.

Die sich aus dieser Untersuchung ableitenden Hauptpunkte sind:

1. Die Mitarbeiter der Universität Jena, die an der Gründung der Heilpädagogischen Anstalt beteiligt waren, haben erkannt, daß sich die "techninische" Pädagogik selbständig machen muß.
2. Seit den 1890er Jahren wurden die Ergebnisse der Kinderforschung allmählich als heilpädagogische Erkenntnisse in der Volksschulpädagogik festgehalten. Die Heilpädagogische Anstalt von Trüper kam jedoch aufgrund der pädagogischen Forderungen der damaligen Volksschullehrer zustande, um das Niveau der Lehrerausbildung in Pädagogischen Universitäts-Seminar und Übungsschule zu erhöhen.
3. Die von Trüper gegründete Heilpädagogische Anstalt war der Anfang einer neuen Bildungsbewegung der ländischen Bildungsanstalt und sie hat unter dem Einfluß von W. Rein bereits seit Beginn die Rolle. Hier lernten hauptsächlich die Lehrkräfte von Volks- und Hilfsschulen die Heilpädagogik und wurden daraufhin zu Trägern der inneren und äußeren Verbreitung der Heilpädagogik.

Key word: Kinderforschung, Heilpädagogik, Heilpädagogische Anstalt, Trüper, Jena